

大地

57. 9. 20

№11

真宗大谷派
浄国寺(23) 5724

母と信仰心

御殿山町 坂本龍一

久し振りに少ない身寄りが集り先祖の法要を浄国寺にて営みました。境内の静かな木立に囲まれた本堂に、今は亡き前住職様の風格ある朗々たる読経のお声、静かな口調にてのご講話に耳をかたむけることしばし、昨日のことの様に思われます。

多忙な毎日に追回されて心静かに身の回りを考える余裕もない日々。反省させられた一日でした。

その翌々年に母が他界致しました。「カタカナ」すら読み書きの出来ない母、若くして夫を亡くして苦しい生活を都会で終戦直前まで過ごし、其の後仏教信仰の厚い郷里で暮すのが念願のようでした。都会で父の命日に仏壇を買いました。

とめ朝夕のお勤めをかゝした事がありませんでした。

丁度新しい仏壇を購入した日の夕方ローソクを点じ鐘を叩いて居りましたら小さな庭に小さな池がありました。その池に一羽の九官鳥が水浴びしてなかなか逃げないのです。その翌朝も又飛んで来たのでこれはきつと鐘の音を聞いて飛んで来たので捕まえて一年ばかりかいました。当時とても不思議なことの様に思えました。文盲の母が教本を見ながら経文をあたかも読めるがごとくにお勤めをするのですが、知らない土地でも、どんな遠くでもお寺を探しお説教を聞きに私もよくお供をさせられました。私もたまに母の横に座らせられて解らない経文を母の言葉のあとにつけたことを覚えて居ります。母の葬儀の際に亡き前住職様のお言葉のなかで、「不幸な生涯でしたけれど最後まで信仰心を唯一心のよりどころとして生きて来られた事がなにもにも優さる幸せではなかったでしょうか。」誠にお言葉どおりだと思えます。

晩年は、信仰一途にお寺詣りの喜びをひまをみては出掛けて居りました。

私はとても母の様な信心はまねられそうもありませんが、母の七回忌も、三度目の入院で過してしまいました。母の信仰心、年とともに少しづつわかる様な気がする昨今です。

①坂本龍一氏は上越市御殿山在住。三年前より働き盛りの身体を病魔に蝕まれきびしい闘病生活を余儀なくされてきた。入院三回とひと口に言っても、それは実に通算一年にも及び、その間の苦しみは本人以外には知るべくもない。しかし氏の表情は、命の瀬戸際に立たされた人ものとは思えぬぐらい明るい。病に負けることなく、病と共存している強さを感じさせてくれる。今年五十二才である。

講演会のお知らせ

11月9日(火)午後1時より

松本梶丸師

石川県松任市本誓寺住職

『ほんものとしせもの』

場所 高田別院
(寺町2丁目)

日記から

山崎武雄

十月十八日。曇り時々晴。夕方より風吹き始む。朝三時、尿検査の為起き、とって所定の場へ出す。四時半大小便。身体が何となく軽くなつた感じ。六時、又採血検査の由。七時朝食、その後又吸入あり。やはり吸入すると気持がよい。痰は夜半から二度程あつたばかり。ずっと楽になる。十時廻診前に睦来てくれ、新しく求めて来た寝衣と着替えさせてくれる。廻診後、睦と二人で病状の事、報恩講の事など話す。子供達も見舞金を十分くれる由、家族親類檀家、その他有縁の人々の御好意、全く感激にたへず。睦、昼前帰宅。独り昼食を頂きつゝ、子供等の至純至孝なるを思い涙がでてたまらなかつた。午后『安曇野』を読む。二時過野口淑子様見舞にお出で下され、色々励まして下さる。有難し。お帰りの後、又『安曇野』を読み始む。吸入も又あり。次第に体力の回復していることがよく判り嬉し。夕食を済した処へ家中で来てくれる。孫たちのあどけなき言葉、つぶらな瞳、寝ていても思い出す。

お盆前の或日東頸城の山本さんが訪ねて来られました。その方は昭和三十九年に御主人を事故で亡くされ、当時まだ小さかった子供さんとお年寄を相手に一生懸命働き抜かれ、漸く子供さんも成人なされほつとされた処です。あれこれ話をして居る中に、御主人の亡くなられた当時の事を次の様に話して下さいました。

「突然戸板に乗せられて血だらけになって運ばれて来た主人を見た時は、驚きと悲しみのあまり涙も出ませんでした。

一応病院へ運ばれ亡くなり、お葬式を済ませても一滴の涙も出ませんでした。食欲がなくなりアイスクリームを漸く流し込むと云う状態でしたので、体はやせて行くばかり、廻りの人達の慰めの言葉も耳に入らず、亡くなった仏の事で頭の中が一ぱいでした。自分だけどうしてこんな目にあわねばならないのだろう思う事はそんな事ばかり。そんなある雨の日自分の家で一番大きな田圃で一人稲を刈ながら。自分はなんでこんな雨の中で一人で稲刈をしなければならないのだろう、そう思

よき話を聞いて
山崎睦

うと涙が止めどもなく流れ田の中心で声を出して泣いて居ました。ふと気が付くと、いつの間にか雨が止みお日様の光が泣いて居た私を柔かく包込んで居りました。その時私は、はつと気付き仏様に出逢った様な気が致しました。今まで自分は自分の悲しみだけで頭が一杯いで外の事がさっぱり見えなかつたが、自分はどうして働けるだけ俸せではないかと思つた瞬間今まで我儘ばかり云つて居たんだと思つと申訳なくお日様に謝り、家に帰って仏壇に向つておわびをしましたら頭も胸もすっきりとして体が軽くなりました。それから苦しい事もそれ程辛くなくなりました。話終つてにっこりされたお顔は、とても爽々しく柔和な感じが致しました。このお話を聞終つた私は身を以って教えて頂いた様な気がして、心にしみて有難く思いました。

みんないゝ事云いながら
何故に自分に聞かせない
みんないい事聞きながら
何故に随喜の涙なき
(金子大栄)

水すまし 流れに向い

さかのぼる

汝がいきほいよ

微かなれども 齊藤茂吉

東頸城郡大島村中野は、山深い谷間の戸敷三十余戸の小さな部落です。民話に出てくる様な連なる山の斜面に段々の田んぼが拓かれ緑の色濃い、静かな集落ですが、過疎化の波は厳しく、中野の部落ではこの数年、赤ちゃんの誕生がありませんし、これからもなさそうです。若者がいないのです。

したっ川のじいちゃん 山崎隆昌

したっ川のじいちゃん 武田老人はこの中野の人です。細身の小さな身体、日に焼けた浅黒い顔、八十に近い齢にもかかわらず、田んぼ仕事、山の仕事、畑の仕事、家の仕事の全てに精を出し働き続けておりました。しかも穏やかでいつもニコニコ笑みを浮かべ部落の人々から尊敬されておりました。中野は雪の深い所です。昭和五十六年正月から降り出した雪は五メートルにもなりました。毎日が雪との格闘でした。高田城趾は花見の

たけなわです。その頃中野では、田んぼにまだ二メートルもの雪がありましたが。家々の軒下にはうず高く雪が残り外が見えませんでした。た。ちようどお昼でした。したっ川のじいちゃんは、コタツに入り酒をチビリチビリやりながら色々の話を聞かせてくれました。そのうちに、「今年の雪はひどいものだった。せっかく育てた二十年もの杉の木をみんな折ってしまった。た」と悲しそうに話すのでした。思わず「それは勿体ないことをし

たねえ、大きく育てばいい金になつたろうに」と相槌をうちました。それに対するじいちゃんの応えが忘れられません。「そりゃあ、勿体ないといえは勿体ないけれど、それよか杉の木が可愛想だ。これから一丁前の木になるところだろうに、真ん中からボキッとやられてしまった。：：：」
小さな苗木から下草を刈り、下枝をおろし繩を張り、大切に大切に育てて来た杉の木は、したっ川のじいちゃんにとって掛替の無い物だったのかも知れません。すぐ

に「そりゃ大損こいたなア」といった自分自身をとても恥しく思いました。
親鸞は歎異抄の第五章で「一切の有情(命のあるもの)は皆もて世々生々(永遠の命のつながりの中で)の父母兄弟なり」と述べております。そこには「命をともしする共感」があります。したっ川のじいちゃんが、「杉の木が可愛想だ」と悲しそうに語る心の底には、何も語らぬ杉の木と命を共にする世界があったように思えるのです。

「星の王子さま」の中でサン・テグジュベリはきつねに次のように語らせています。
「さっきの秘密をいおうかね。なんでもないことだよ。心で見なぐちゃ、ものごとはよく見えないことさ。かんじんなことは目には見えないんだよ。」
大切なもの、本当に大切なものは心でしかみえないのでしよう。今年(五十七年)三月一日、突然したっ川のじいちゃんが亡くなりました。たまらなく寂しく悲しく思います。今もあの笑顔を想い出します。

みょうが

山崎 慎子

みょうがの季節である。蓮の花にその姿が何となく似ていて、ほろ苦い味が口いっぱい広がる。こんな物の、一体どこがうまいのだろうと思うが、旬になれば、やはり食べたいなと思う物の一つである。ナスの味噌汁に入れたも格別だし、きゅうりと一緒にかつをぶしであえ、はりしょうがを添えてもうまい。味噌の田楽にしても、又良い。

高田の西にある正善寺は、山ふところにいだかれた静かな山里であるが、またみょうがの産地でもある。お檀家の方のご縁で、毎年お盆の頃になると、正善寺の三浦さんという方が沢山のみょうがを届けて下さる。

子供の頃の教科書にも『きつちむさん』の逸話として習った覚えがあるが、みょうがが物忘れと結びついたので、一体どんなことに由来するのだろう。

みょうがといえは、母から聞いた亡くなった父の次のような話が

ある。父がまだ教員をやっていた頃、東頸城に下宿をしていた時のこと。来る日も来る日もみょうがの味噌汁が続いたことがあった。父と暮した十年の間に、食べ物についてのわがまを、私は殆ど聞いたことがない。どんな物でも喜んでくれたし、それが特別うまかったり、自分の好物だったりした時には殊の外喜んでくれる人だった。料理をする者にとってはほんとうに張り合いのある人だった。そんな父ではあったが、連日のみょうがにはさすがに食傷したらしい。ある朝、ついに父は下宿のおばあさんに言った。そうだと「ばあちゃん、ばあちゃん、この頃俺は、どうも物忘れがひどくていけんのだが」

やんわりとみょうが拒否宣言をした父に件のおばあちゃんは「そうかね、そうかね。そうしたらあしたっからみょうがの味噌汁やめとくかね。」と答えたそうである。

まだ若かった父の、みょうがにまつわるこのエピソードは、何度聞いても、その度にほのほのと心暖まる私の大好きな話である。この夏はどういうわけか、いつ

もの年に増して、みょうがを沢山食べたような気がするが、他のことは全部忘れても、この父とおばあさんの話は、忘れられない話になりそうである。

あしがき

〇『大地』十一号を秋風と共にお届け致します。毎号遅れがちでお詫申します。それでも時々伝えられる『大地』への感想に励まされて、どうやらここまできつつけました。

〇裏寺町通の下水道整備に伴って墓地の西側の杉の木が八本ばかり切り伐されてしまいました。杉の木がそこに立っていた時には、そのことを当然と思いついた気にもとめなかつたのに、いざ別れの時が来てみると、寂しくもあり、又やりきれない思いがしています。

〇何かと行事の多い時期ではあります。十一月一日は報恩講をつとめます。又十一月九日には別院で松本樞丸先生の講演会もあります。是非お出かけ下さい。

〇急に日が短くなりました。そろそろ秋奉賀の季節です。今年度分護持会費も大分お納め頂きました。が、お伺いの折には宜しくお願ひ致します。皆様、おからだおとい下さい。

(慎子記)